

『南山神学』45号(2022年3月) pp.51-85.

「魂は媒体を介して物的質料と合一されて いるのであるか」

—トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』
第9問題について—

井上 淳

トマス・アクィナスは『定期討論集 魂について』(*Quaestiones disputatae de anima*)の第9問題において¹、「魂は媒体を介して〔身体という〕物的質料と合一されているのであるか」(*Utrum anima uniatur materie corporali per medium.*)という問題について論じている²。この問題に先立つ第8問題におい

¹ トマス・アクィナスの著作の執筆年代については J. P. トレルの次の研究書に示されている研究者の間の一般的な見解に従う。Jean-Pierre Torrell, *Initiation à Saint Thomas d'Aquin: Sa personne et son oeuvre* (Paris: Les Éditions du Cerf, 2015). 邦訳は『トマス・アクィナス人と著作』保井亮人訳(知泉書館, 2018年)。それによると、トマスの主著とされる『神学大全』の中で人間本性について論じられている ST I, qq. 75-119 の執筆は 1267-68 年、その箇所と内容的に密接な関係にあるこの『定期討論集 魂について』QDA の執筆は、それに少し先立つ 1265-66 年である(保井亮人訳, 567 頁参照)。

² 本稿の執筆にあたっては、主に次の文献を参照した。

Davies, Brian. *Thomas Aquinas's Summa Theologiae: A Guide and Commentary*. New York: Oxford University Press, 2014.

Eberl, Jason T. "Aquinas on the Nature of Human Beings." *The Review of Metaphysics* 58, 2 (2004), pp. 333-365.

Pasnau, Robert. *Thomas Aquinas on Human Nature: A Philosophical Study of Summa theologiae 1a 75-89*. Cambridge: Cambridge University Press, 2002.

———. *Thomas Aquinas: The Treatise on Human Nature, Summa Theologiae 1a 75-89*. Cambridge: Hackett Publishing Company, Inc., 2002.

てトマスは理性的な魂が人間の身体のような物体と合一されることは適切であるか否かについて考察している³。そこにおいてトマスは、この世において我々人間が持っている身体は可滅的なものであり、疲労しやすすいものでもあるため、理性的魂の知性的活動の妨げともなりうる欠点を有してはいるが、しかし魂の知性的活動のために身体は必要不可欠なものであり、人間の身体は理性的魂に最も適切な態勢を有しているのだから、このような身体との合一は適切なことであると結論づけている。知性認識のためには諸々の可知的形象が必要であるが、人間の魂は天使たちとは異なり、可知的形象をはじめから与えられているのではない。人間は、この世の生においては、外部の物的事物から感覚の力を通して諸々の可知的形象を獲得しなければならない。それゆえに、感覚的能力が活動できるための諸々の器官を有する身体との合一が必要なのである。トマスによれば、人間の身体は優れた触覚を持ち、また表象力、記憶力、思考力といった内的感覚能力のために優れた態勢を有する脳を持ち、更には直立していることにより自由な活動をなし得る。人間の身体は魂の知性的活動のために最も適した態勢を有していると言えるのである⁴。

では人間の魂はその身体とどのような仕方で合一しているのであろうか。魂と身体は無媒介的、直接的に合一されているのか、あるいは何らかの媒体を介して合一されているのか。第9問題で論じられているのはこのことについてである。

White, Kevin. "Aquinas on the Immediacy of the Union of Soul and Body." in *Studies in Thomistic Theology*, ed. Paul Lockey (Houston: Center for Thomistic Studies, University of St. Thomas, 1995), 209-280.

稲垣良典『トマス・アキナス哲学の研究』（創文社、1970年）

川添信介『トマス・アキナスの心身問題』（知泉書館、2009年）

周藤多紀「魂の諸能力の協働—トマス・アキナスの認識論の一断面—」『中世哲学研究 Veritas』第22号（京大中世哲学研究会、2003年）104-112.

³ 拙稿「「理性的魂は人間の身体のような物体と合一されるべきであったか」—トマス・アキナス『定期討論集 魂について』第8問題について—」『南山神学』第44号（在名古屋教皇庁認可神学院・南山大学キリスト教学科、2021年）99-138を参照。

⁴ Cf. QDA, q. 8, cor.

このことが問題となる主な理由の一つは、魂と身体との合一が、全然異質な別々の実体どうしの合一であるような捉え方をする人々がいたからである。人間の理性的魂は、非物体的であり単純な実体である。一方、人間の身体は、諸々の元素から成る物的なものであり、多くの部分から成る複合的なものである⁵。もし魂と身体がそれぞれ独立した別の実体であると考え、魂と身体との合一を異なる別々の実体の結合として捉えるならば、その両者の結合のためには何らかの媒体がその間に入る必要があるようにも思われるのである⁶。かくして、トマス・アクィナスによれば、たとえばある人々は精気や体液が魂と身体との間の媒体であると主張し⁷、ある人々は光が媒体であると主張し、ある人々は魂の能力などが媒体であると主張したのであった⁸。

トマスは魂は身体の形相であるというアリストテレス的な立場を固守しながらも、魂は身体の動者でもあるという点を考慮して、形相としての魂と動者としての魂の二つの側面から、この問題に対する答えを導き出している。結論を先に言えば、身体全体の実体的形相としての魂は無媒介的に身体と合一されているのであるが、身体の諸部分のはたらきの根源である動者としての魂は、媒体を介して身体と合一されているのである。では、それはどのような意味で理解されうるのであろうか。

質料に端的な意味での存在を与えるのは、実体的形相である。実体的形相によって質料は、個の実体として存在するものとなるからである。事物は数的に一つと同じ実体的形相によって、実体として存在するものであり、また最終的

⁵ Cf. QDA, q. 9, arg. 18.

⁶ 魂と身体との合一は、一つの実体が別の実体と合一されるような仕方での合一であるとする考え方は、トマスによれば、魂を身体の動者としてのみ捉えたプラトンの教説に基づくものである。Cf. QDA, q. 9, cor., u. 301-306; STL, q. 76, a. 7, cor.: 「もし、プラトン学派のひとつに從って、魂は動源 motor として身体と一つになっているのでしかないとするならば、人間の、乃至はおよそどのような動物であってもその、魂とそれの身体との間に、何らか他の物体が媒介として介入するといっても決して適切たるを失うものではない。けだし、離れた何ものかをもっと近くの媒介を通じて動かすということは「動源」に適合することだからである。」大鹿一正訳『神学大全』6（創文社、1969年）

⁷ Cf. QDA, q. 9, arg. 15

⁸ Cf. QDA, q. 9, cor., u. 306-309; arg. 11

で最特殊な種に属するものでもあり、また中間的なすべての類に属するものでもあるのだとトマスは主張する⁹。人間の魂は、実体の限定された種において人間を構成するのであるから、実体的形相である。それゆえ、実体的形相である魂と質料である身体の間には、魂以外の他の実体的形相は全く存在しない。人間は理性的魂という一つの实体的形相によって、完全性の様々な段階に即して完成されているのである。すなわち各々の人間は、物的存在であり、生命体であり、動物であるといった下位の段階の完全性をも全て、数的に一つの理性的魂によって与えられているのである¹⁰。それゆえ、先に別の形相によって身体が形成されていて、すでに形成されているその身体と魂が合一しているという考え方をトマスは否定する¹¹。魂と身体はそれぞれが何らかの種や類に属する別々の実体なのではなく、魂と身体の合一による複合体である「人間」が種や類に属するのである¹²。形相としての魂は身体全体に存在を直接的に与えている。すなわち、存在を与える実体的形相としての魂と身体との合一は、直接的であり無媒体的である。それゆえ、身体に存在を与えている実体的形相としての魂と身体の間には、いかなる媒体も存在しないのである。

しかし一方において、魂は身体に存在を与えているだけではなく、身体のはたらきの根源でもある。魂は現実態においてある限りにおいて身体の形相なのであり、同様に身体の動者である限りにおいて現実態である¹³。トマスによれば、全てものは現実態にある限りにおいてはたらくのであるから、身体に存在を与えているその同じ魂は、身体のはたらきの根源でもある。そして、存在を与えることにおいて完全性が高い形相であればあるほど、はたらきにおける能力もより高い。更には、完全性がより高い形相であるほど、より多様なはたらきを有しているのであり、それゆえに完全性の高い形相は、質料における附帯性の多様さに加えて多様な部分を有することを必要とする。理性的魂は質料

⁹ Cf. *QDA*, q. 9, cor., u. 155-172

¹⁰ Cf. *QDA*, q. 9, cor., u. 230-245

¹¹ Cf. *QDA*, q. 9, ad 7

¹² Cf. *QDA*, q. 9, ad 18

¹³ Cf. *QDA*, q. 9, ad. 2

的形相の中で最も完全な形相である。それゆえに、人間は様々に異なるはたらきをなすための最も多様な身体部分を有しているのである。そして魂は、身体各部分のはたらきに適した仕方で、各部分に実体的存在を与えているのである¹⁴。

身体各部分はいわば魂の道具のようなものである。諸々の道具には序列があり、その序列は、はたらきの序列に即している。魂によってなされる多様なはたらきにおいても、そのはたらきに即した身体の諸々の部分の間に序列がある。つまり身体の一つの部分がそのはたらきをなすために、別の部分によって動かされるということが必然的に生じるのである¹⁵。この観点から、魂が身体の動者であり諸々のはたらきの根源である限りにおいて、魂と身体全体との間に何らかの媒体が入ると言えるのである。魂は身体のある最初の部分を媒介として他の諸部分をそれぞれのはたらきへと動かすのだからである。たとえば、魂は、心臓を媒介としてその他の身体部分を生命的なはたらきへと動かしている¹⁶。このように、魂が最初にその部分を通してそのはたらきを行う身体の一つの部分が存在し、この部分がそのはたらきの始点である限りにおいて、その部分が魂とそのはたらきに関与する身体他のすべての部分との間の媒体となるのである¹⁷。しかし、魂と身体を別々のものとして捉えてはならない。魂は身体どの部分にも存在を与えているからである。それゆえ、人間もしくは動物において「動かす部分」と「動かされる部分」を分けるとすれば、それは「魂」と「身体」の区別なのではなくて、魂ある身体 (*corpus animatum*) の

¹⁴ Cf. QDA, q. 9, cor., u. 246-280

¹⁵ トマスは ad 14 において、形相は質料をそれが存在するために完成するだけでなく、それがはたらきをなすためにも完成するのだから、身体の諸々の部分は、魂によって様々な仕方で、各部分がそれぞれのはたらきに適合するように完成される。そして諸々のはたらきの序列に即して、各部分の間には序列が存在すると述べている。

¹⁶ Cf. QDA, q. 9, cor., u. 283-293. 動者としての魂が心臓を媒体として身体他の部分と合一されていることについては ad 13 にも述べられている。

¹⁷ Cf. QDA, q. 9, ad 4

一つの部分とその他の部分の区別なのである。魂によって存在を与えられている最初の身体部分を始点として、魂はその他の身体部分を動かすのである¹⁸。

以上のことからトマスはこう結論づける。形相としての魂は、身体に存在を与えている限りにおいて、無媒介的に身体と合一されており、身体のあらゆる部分に実体的な特有の存在を与えている。しかし動者としての魂は、はたらきの根源である限りにおいて、媒体を介して身体と合一されていると言えるのである¹⁹。魂が形相としては無媒介的に身体と合一されており、動者としては媒体を介して身体と合一されているという考え方は、トマス自身も述べているように、アリストテレスの教説に基づくものである²⁰。形相としての魂は自体的に質料に存在を与えるのであるから、自体的に固有の質料と合一されているのであり、形相と質料を結びつけるいかなる媒体をも介さず、自体的かつ無媒介的に直接質料と合一されているのである²¹。

翻訳と註

トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第9問題

「魂は媒体を介して物的質料と合一されているのであるか」²²

¹⁸ Cf. QDA, q. 9, ad 6

¹⁹ Cf. QDA, q. 9, cor., u. 293-298

²⁰ Cf. QDA, q. 9, cor., u. 298-300

²¹ Cf. QDA, q. 9, cor., u. 309-314. Kevin White は “Aquinas on the Immediacy of the Union of Soul and Body.” in *Studies in Thomistic Theology*, ed. Paul Lockey (Houston: Center for Thomistic Studies, University of St. Thomas, 1995), 209-280 において、QDA q. 9 の並行箇所をすべて比較してみると、魂と身体との無媒介的な合一についてのトマスの議論には進歩が見られ、最も円熟した議論が展開されているのがこの QDA q.9 であると述べている。そしてそのことに基づいて White は QDA が 1267-68 に執筆されたとされている *Summa theologiae* I, qq. 75-89 よりも後に執筆されたものであろうと分析している。しかし Leonina 版の編者 Bazán はそれを否定し (Leonina 版 QDA, pp. 23*-24*), QDA の執筆時期は *Summa theologiae* I, qq. 75-89 より前の 1266-67 であるとしている (p. 22*, 25*)。トマスの著作の執筆年代については J.-P. トレル 『トマス・アクィナス 人と著作』保井亮人訳 (知泉学術叢書, 2018 年) を参照。

²² 本訳は Leonina 版, すなわち, B. C. Bazán ed., *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita, Tomus XXIV-1, Quaestiones Disputatae de anima* (Roma: Commissio Leonina, 1996) を底本とし, 註の多くもこの版に依拠した。しかし次の二つの版も常に参

第9問題では、[人間の]魂は媒体を介して (per medium) [身体という] 物體的質料に合一されているのか否かが問われる²³。そして [その答は] 然りであるようにも思われる。なぜなら、

【異論】

(1) 魂は身体と合成される (miscetur) ための諸力 (uires) を有していると『霊と魂について』に述べられている²⁴。しかるに魂の諸力は魂の本質

照し、Leonina 版と異なる場合にはそれを註記した。ただし綴りの違いなどの、さほど重要ではないと思われる異同については一々註記しなかった：James H. Robb, ed., *St. Thomas Aquinas Quaestiones De Anima* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1968); M. Calcaterra and T.S. Centi ed., *Quaestiones Disputatae De Anima in Quaestiones Disputatae*, vol. 2, 10th edition (Turin: Marietti, 1965)。以降 Robb 版および Marietti 版と略記する。また、翻訳にあたっては、以下の現代語訳を参照した。John P. Rowan, *The Soul: A Translation of St. Thomas Aquinas' De Anima* (St. Louis: Herder Book Co., 1951); St. Thomas Aquinas, *Questions on the Soul*, trans. James H. Robb (Milwaukee: Marquette University Press, 1984); Saint Thomas d'Aquin, *Questions disputées de l'âme*, introduction, traduction et notes par Jean-Marie Vernier (Paris: L'Harmattan, 2001)。以降 Rowan 訳、Robb 訳、および Vernier 訳と略記する。Rowan 訳は Marietti 版を用いた翻訳、Robb 訳は本人の校訂版を用いた翻訳、Vernier 訳は Leonina 版を用いた翻訳である。

なお、本稿で用いるトマス・アキナスの著作とその略号は次の通りである。*Quaestiones disputatae de anima* (QDA), *Quaestiones disputatae de veritate* (QDV), *Quaestiones disputatae de potentia* (QDP), *Quaestio disputata De spiritualibus creaturis* (*De spir. creat.*), *Quaestiones disputatae De malo* (*De malo*), *Super Librum De causis* (*In De causis*), *Sententia Libri De anima* (*In De anima*), *Sententia super Meteora* (*In Meteor.*), *Sententia super Metaphysicam* (*In Metaph.*), *Sententia super Physicam* (*In Phys.*), *Sententia super librum De caelo et mundo* (*In De caelo*), *Expositio Libri Posteriorum* (*In Anal. Post.*), *Scriptum super libros Sententiarum* (SSS), *Summa theologiae* (ST), *Summa contra gentiles* (SCG), *Quaestiones de quolibet* (*Quodl.*), *Compendium theologiae* (CT), *De unitate intellectus contra Averroistas* (*De unitate intellectus*), *De ente et essentia* (*De ente*), *De substantiis separatis* (*De subst. Separ.*), *Super Boethium De Trinitate* (*In De Trinitate*)。テキストは SSS に Mandonnet et Moos 版を、QDP, SCG, *In Metaph.*, *In Phys.*, *In De caelo* に Marietti 版を、*In De causis* に Saffrey 版を用いた他は、すべて Leonina 版を用いた。

²³ QDA, q. 9 の平行箇所として Leonina 版は次の箇所を挙げている。SSS II, d. 1, q. 2, a. 4, ad 3; SCG II, c. 71; ST I, q. 76, a. 6 et a. 7; *In De anima* II, 1; *De spir. creat.* a. 3; *In Metaph.* VIII, 7, 1045a7-1045b16; *Quodl.* I, q. 4, a. 1; *Quodl.* XII, q. 7, a. unicus.

²⁴ 偽アウグスティヌス Pseudo-Augustinus, *Liber de spiritu et anima*, c. 20 (PL 40, 794) を参照。この書については本問題の第一異論解答を参照

(*essentia*²⁵)とは別のものである。それゆえ、魂は何らかの媒体を介して身体と合一されている (*unitur*) ののである²⁶。

- (2) ところが〔この論に対して〕、魂が身体に能力という媒体によって合一されるのは、身体の動者 (*motor*) である限りにおいてであって、身体の形相 (*forma*) である限りにおいてではないという意見があった²⁷。——それに対する反論。魂が身体の形相であるのは、現実態である限りにおいてであり、身体の動者であるのは、はたらきの根源である限りにおいてである。しかるに、魂がはたらきの根源であるのは、現実態である限りにおいてである。なぜなら、全てのもは現実態である限りにおいてはたらきをなすからである。つまり、同じことに基づいて魂は身体の形相でありまた動者なのである。それゆえ、身体の動者であるか形相であるかによって魂について区別をつけるべきではない。
- (3) 更に。身体の動者としての魂は、附帯的な仕方で (*per accidens*) 身体と合一されているのではない。なぜなら、それでは魂と身体の自体的・本質的な合一 (*unum per se*) にはならないからである。それゆえ〔動者としての〕魂は、自体的な仕方で (*per se*) 身体と合一されているのである。しかるに、自体的な仕方では他のものと合一されているものは²⁸、媒体なしに合一されている。したがって、魂が媒体を介して身体と合一されているのではないのは、魂が動者である限りにおいてである。

²⁵ Leonina 版と Marietti 版は *essentia*, Robb 版は *esse*.

²⁶ Cf. *De spir. creat.* a. 3, arg. 6; *ST I*, q. 76, a. 6, arg. 3: 「霊的なものは、ちからの接触によって物的なものに接する。だが、魂のちからとはその能力にほかならない。それゆえ魂は、能力という一つの附帯性を媒介として身体と一つになっているのであると考えられる。」(大鹿訳)

²⁷ Cf. *SCG II*, c. 71, 1481: 「とはいえ、魂と身体との間に何か媒介となるものがあると語るとは可能である。だが、その媒介は存在するという点においてではなく、動かすという点と生成〔誕生〕の途上という点においてのことである。」川添信介訳註『トマス・アクィナスの心身問題』(知泉書館, 2009年)

²⁸ Leonina 版は *unitur alteri*, Robb 版と Marietti 版は *unitur alicui*.

- (4) 更に。魂が動者として身体と合一されているのは、諸々のはたらきの根源である限りにおいてである²⁹。しかるに、『魂について』第一巻に述べられているように³⁰、魂の諸々のはたらきは、魂のみのはたらきではなく、[魂と身体から成る]複合体のはたらきである。それゆえ、はたらきに関する限り、魂と身体の間には何の媒体も入らない。したがって、魂が媒体を介して身体と合一されているのではないのは、魂が動者である限りにおいてである。
- (5) 更に。魂は身体の形相である限りにおいても、媒体を介して身体と合一されているように思われる。と言うのも、形相はどんな質料とでも合一されるわけではなく、自らに適合的な固有の質料と合一されるからである³¹。しかるに、質料がこの形相やあの形相に固有のものとなるのは固有の態勢 (dispositiones) によってなのであり、その固有の態勢とはすなわち、その事物の固有の附帯性である。たとえば熱と乾燥が火の固有の附帯性であるごとくに³²。それゆえ、形相は諸々の固有の附帯性を媒介として質料と合一されるのである。しかるに、魂あるものの (animatorum) 固有の附帯性と

²⁹ Leonina 版は principium operationum, Robb 版と Marietti 版は principium operationis.

³⁰ アリストテレス『魂について』I, 408b11-15: 「魂が怒る」と語るのは、あたかも人が「魂が機を織る」とか「魂が家を建てると語るのと同然だということになるだろう。実際のところ、「魂が憐れむ」「魂が学ぶ」「魂が思考する」と語らずに、「人間が魂によってそうする」と語るほうが、おそらくより適切であろう。」中畑正志訳「魂について」『アリストテレス全集』7 (岩波書店, 2014 年)

³¹ Cf. アリストテレス『形而上学』1044a.27-30: 「それぞれの質料は同じでも、それから相異なるものどもが、それぞれを動かす原因の異なるによって生じうる、たとえば、同じ木材から箱も作られ寝台も作られる。しかし、或る相異なるものどもにおいては、それらの質料も相異ならざるをえない。たとえば、鋸は木材からは生じないであろうし、またどのような動かす原因によってもこのことは不可能であろう。羊毛や木材からはどのようにしても鋸は作りえないであろうから。」出隆訳『アリストテレス全集』12 (岩波書店, 1968 年)

³² Cf. アリストテレス『生成と消滅について』330a30-330b5: 「それゆえ明らかに、基本要素の組み合わせは四つになるであろう。すなわち、熱と乾、湿と熱、またさらに冷と乾、冷と湿である。そしてこれらは、単純なものとして現れる諸物体——すなわち火と空気と水と土——と理論的に整合している。すなわち、火は熱くて乾いており、空気は熱くて湿っており、[中略] 水は冷たくて湿っており、土は冷たくて乾いている。」金山弥平訳『アリストテレス全集』5 (岩波書店, 2013 年)

は魂の諸々の能力である。それゆえ、形相としての魂は、諸々の能力を媒介として身体と合一されているのである。

- (6) 更に。動物 (animal) は「自らを動かすもの」(mouens se ipsum) である。しかるに『自然学』第八巻で論証されているように³³、「自らを動かすもの」は「動かすもの」と「動かされるもの」の二つの部分に分かたれる。動物の場合「動かすもの」は魂である。しかし「動かされるもの」は質料のみではありえない。なぜなら『自然学』第五巻に言われているように³⁴、ただ可能態にしかないものは〔あらぬものなのだから〕動かされることのないからである。さて、重たい物体も軽い物体も、それらはそれ自体においては運動を有するけれども³⁵、自らを動かすことはない。なぜなら、それらは質料と形相にのみ分かたれるのであり、質料は動かされるものではありえ

³³ Cf. アリストテレス『自然学』VIII, 255a10-15: 「いやしくもそれら自身が自らを運動変化させているのであれば、自らによって一種類だけの運動変化しかしないというのは理に合わないことである。さらにまた、〔重いものや軽いもののように〕連続一体的で本性的に一体をなすものが、いかにしてそのもの自身が自らを運動変化させうるのだろうか。単に接触によってではなしに一つにして連続一体的なものは、そういう仕方では作用の授受がありえないからであり、ものが分離独立し合っている場合に限って、その一方が作用を及ぼし、他方が作用を受けるようになっているのである。」; 257b10-14: 「運動変化させる側のものはすでに活動現実態においてあり、たとえば熱いものは熱くさせ、総じて言えば、形相を有するものが形相を生ぜしめるのである。したがって、〔もし自らを運動変化させるものがそのもの自身を全体として運動変化させるものとすれば〕同じものが同じ関連において、同時に熱くもあり熱くなくもあることになる。そして、運動変化させるものが運動変化するものと名前を同じくしなければならぬかぎりのものは、他のいづれについても、そのことは同様である。とすれば、そのもの自身が自らを運動変化させるものには、運動変化させる部分と運動変化する部分とがあるのである。」内山勝利訳『アリストテレス全集』4 (岩波書店, 2017年)

³⁴ Cf. アリストテレス『自然学』V, 255a20-23: 「そして「あらざる」という言葉は多義的に用いられるが、結合あるいは分断によるあらぬものも、可能態において(すら)あらぬもの、すなわち活動現実態における端的な意味であるものに対置されたあらぬものも、運動変化することができずとすれば、〔中略〕あらぬものが運動変化することは不可能ということになる。」(内山訳)

³⁵ 重い物体と軽い物体の運動についてはアリストテレス『天界について』第一巻第三章を参照: 「さて「重い」のは本来的に中心に向かって運動するものであり、「軽い」のは中心から離れ去るもの、「最も重い」のは下方に運動するものすべての下に位置するもの、そして「最も軽い」のは上方に運動するものすべての上に昇り立つものであるとしよう。」山田道夫訳『アリストテレス全集』5 (岩波書店, 2013年)

ないからである。残るところそれゆえ、動物は「魂」と「質料と形相から複合されている何か他の部分³⁶」とに分かたれるということになる。このことから結論づけられるのは、魂は何らかの形相を媒介として物的質料と合一されているということである。

- (7) 更に。いかなる形相の定義においても、その形相に固有の質料が規定されている。しかるに『魂について』第二巻に明らかなように、形相である限りにおける魂の定義においては、可能的に生命を持つ器官的で自然的な身体が規定されている³⁷。それゆえ魂は、固有の質料として、このような身体と合一されているのである。しかしこのような身体、すなわち可能的に生命を持つ器官的で自然的な身体は、何らかの形相によって存在する以外には存在しえない。それゆえ、魂は、まず先にその質料を完成している何らかの形相を媒介として、その質料と合一されているのである³⁸。
- (8) 更に。『創世記』第一章に「神は地の泥で人を形づくり、そしてその顔に命の息を吹き込まれた」と述べられている³⁹。命の息とは魂のことである。つまり、何らかの形相が魂との合一に先だって質料の内にあるということである⁴⁰。したがって、魂は別の形相を媒介として身体的質料と合一されているのである⁴¹。
- (9) 更に。諸々の形相が質料と合一されるのは、質料がそれらの形相に対して可能態にあるからである。しかるに質料は、他の諸々の形相よりも前に、諸元素 (*elementa*) の形相に対して可能態にある⁴²。それゆえ、諸元素の形

³⁶ Leonina 版は *animam et aliquam aliam partem*, Robb 版と Marietti 版は *animam et aliquam partem*. (イタリックは筆者)

³⁷ Cf. アリストテレス『魂について』II, 412a27-28: 「魂とは「可能的に生命をもつ自然的物体の、第一次の終極実現状態」と規定される。」 (中畑訳)

³⁸ Cf. *De spir. creat.* a. 3, arg. 2

³⁹ 『創世記』2.7

⁴⁰ Leonina 版と Marietti 版は *aliqua forma*, Robb 版は *aliqua formatio* (形成)

⁴¹ Cf. *Quodl.* I, q. 4, a. 1, arg. 1

⁴² Cf. アリストテレス『生成と消滅について』329a25-26: 「感覚されうる諸物体の素材 (質料) が何か存在するが、しかしそれは離存可能ではなく、つねに反対的性質を伴うものであり、この素材 (質料) からいわゆる基本要素が生じる。」 (金山訳)

相を媒介とすることなしに、魂やその他の諸形相が質料と合一されることはないのである。

- (10) 更に。人間およびあらゆる動物の身体は混合物体 (*corpus mixtum*) である。しかるに、混合物体 (*mixtum*) においては、当然、諸々の元素の形相がその本質に即して存続している。そうでなければ、それは諸々の元素の崩壊であって、混合ではないであろう。それゆえ魂は、他の諸形相を媒介として質料と合一されているのである⁴³。
- (11) 更に。知性的魂とは、知性的である限りにおける形相である。しかるに、知性認識のはたらきは他の諸々の能力の媒介によるものである⁴⁴。それゆえ、魂は形相として他の諸々の能力の媒介によって身体と合一されているのである。
- (12) 更に。魂はどんな身体とでも合一されるのではなく、自らと均衡のとれた身体と合一されるのである。それゆえ、魂と身体の間には、当然、均衡 (*proportio*) というものが存在している。したがって、魂は均衡を媒介として身体と合一されているのである。
- (13) 更に。あらゆるものは、離れているものに対しては、自らにより近接しているものを通してはたらく⁴⁵。しかるに、魂の力は心臓を通して身体全体に及ぼされるのであるから、心臓は身体他のどの部分よりも魂に近接している。このように、魂は心臓を媒介として身体と合一されているのである。

⁴³ Cf. *ST I*, q. 76, a. 4, arg. 4: 「人間の身体は混合物体 *corpus mixtum* である。然るに混合 *mixtio* ということは質料のみによっては生じない。その場合にはすなわち、ただ壊滅あるのみだろうからである。混合物体には、それゆえ、構成諸要素の形相という実体的形相がやはり存在していることを必要とする。従って、人間の身体においては、知性的魂のほかになおそれ以外の実体的形相が存在しているはずである。」 (大鹿訳)

⁴⁴ Cf. *ST I*, q. 76, a. 4, arg. 3: 「霊的なものは、ちからの接触 *contactus virtutis* によって物的なものに接する。だが、魂のちからとはその能力にほかならない。それゆえ魂は、能力という一つの附帯性を媒介として身体と一つになっているのであると考えられる。」 (大鹿訳)

⁴⁵ Leonina 版は *in remota per id quod est sibi magis proximum*, Robb 版は *in remoto per id quod est maxime proximum*, Marietti 版は *in remotiora per id quod est maxime proximum*. (イタリックは筆者)

- (14) 更に。身体の諸部分には、相異と相互の関係性が見られる。しかし、魂は自らの本質に関する限り単純である。形相は自らと均衡のとれた完成されるものと合一されるのであるから⁴⁶、魂ははじめに身体の一部と合一され、その部分を媒介として、他の諸部分と合一されているように思われる。
- (15) 更に。魂は身体よりも上位のものである。しかし、魂の下位の諸能力は上位の諸能力を身体に結びつけている⁴⁷。と言うのも、知性が身体を必要とするのは、〔形象を〕そこから受け取る表象力と感覚力のゆえに他ならないからである。それゆえ、逆に言うと、身体はたとえば精気 (spiritus) や体液 (humor) のような、その最上のものでありより単純なものを介して、魂と合一されているのである。
- (16) 更に。それが取り除かれると一つにされているものの合一が解消されてしまうところのものが、それらのものの間の媒体であると思われる。しかるに、精気が取り除かれたり、自然本性的な熱が消し去られたり、自然本性的な湿気が乾かされると⁴⁸、魂と身体の合一は解消されてしまう。それゆえ、以上述べたものが魂と身体の中の媒体なのである⁴⁹。
- (17) 更に。魂が自然本性的に身体と合一されるように、そのように個別のこの魂は個別のこの身体と合一されている。しかるに、この身体は限定された

⁴⁶ Leonina 版は *forma sibi proportionato perfectibili uniatur*, Robb 版と Marietti 版は *forma sit proportionata materiae perfectibili*.

⁴⁷ Leonina 版は *inferiores vires anime ligant superiores corpori*, Robb 版は *inferiores vires animae ligant superiores vires corporis*, Marietti 版は *inferiores vires animae ligant superiores corporis*. (イタリックは筆者)

⁴⁸ Leonina 版は *humido naturali*, Robb 版と Marietti 版は *humido radicali*.

⁴⁹ Cf. *ST I*, q. 76, a. 7, arg. 2: 「それが除かれると一つになっているものの合一が解消されるごときものは、その媒介であると考えられる。然るに、精気 spiritus がなくなれば魂は身体から離れ去るのである。それゆえ、精気という或る繊細な物体が身体と魂の合一における媒介をなしている。」 (大鹿訳)

体積 (dimensiones) を有していることによって⁵⁰, この身体なのである⁵¹。それゆえ, 魂は限定された体積を媒介として身体と合一されているのである。

- (18) 更に, 隔たりがあるものは媒体を介さずには結合されない。しかるに, 魂と身体は⁵², 最高度に隔たりがあるように思われる。なぜなら, 一方は非物体的で単純なものであり, 他方は物体的で最高度に複合的なものだからである。それゆえ, 媒体を介さずに魂が身体と合一されることはないのである⁵³。
- (19) 更に, 魂は自然本性的に, 天体を動かしている諸々の離在的知性実体と似ている⁵⁴。そして, それぞれの「動かすもの」と「動かされるもの」の関係性は同じであると言われている⁵⁵。それゆえ, 魂によって「動かされるもの」である人間の身体は, その中に天体の自然本性に属する何らかのものを有しており, それを媒介として魂は身体と合一されているのだと思われる⁵⁶。

【反対異論】

⁵⁰ Leonina 版は *sub dimationibus terminatis*, Robb 版と Marietti 版は *sub aliquibus dimationibus terminatis*.

⁵¹ Cf. *De ente*, II, u. 73-77: 「どのような仕方で解された場合でも質料は個体化の根源であるというのではなく, 指定された質料のみがそうであることを知っていなければならない。そして私が指定された質料と言うのは, 確定された諸次元のもとで考察された質料のことである。」稲垣良典訳『在るものと本質について』(知泉書館, 2012年)

⁵² Leonina 版は *anima et corpus*, Robb 版と Marietti 版は *anima et corpus humanum*.

⁵³ Cf. *ST I*, q. 76, a. 7, arg. 3: 「非常に隔たったものは, 媒介によるのでなければ一つになることはない。然るに, 知性的魂は, 非物体的であること, ならびに不可滅的であることによって, 身体という物体から隔たっている。それゆえ, 魂が身体と一つになっているのは何らか不可滅的な物体の媒介によると考えられる。」(大鹿訳)

⁵⁴ Leonina 版は *similis in natura intellectualibus substantiis separatis*, Robb 版と Marietti 版は *similis in natura intellectuali substantiis separatis*. (イタリックは筆者)

⁵⁵ Leonina 版は *eadem dicitur esse habitudo motorum et mobiliium*, Robb 版は *eadem videtur esse habitudo motorum et mobiliium*, Marietti 版は *eadem videtur esse habitudo motorum et mobiliium*. (イタリックは筆者)

⁵⁶ Leonina 版と Marietti 版は *quo mediante anima sibi uniatur*, Robb 版は *quod mediante anima sibi uniatur*.

しかし反対に。哲学者（アリストテレス）は『形而上学』第八巻において、形相は無媒介的に質料と合一されていると述べている⁵⁷。しかるに、魂は形相として身体と合一されている。それゆえ、魂は無媒介的に身体と合一されているのである。

【解答】

解答。『原因論』に述べられているように⁵⁸、あらゆるものの中で、最も無媒介的にそして最も親密に事物に適合するのは存在（*esse*）である。それゆえ、質料は形相によって存在を現実態において持つのであるから、質料に存在を与える形相が、何よりもまず先に質料に到来し、他の何よりも無媒介的に質料に内在するということが理解されなければならない。更には、質料に端的な意味での存在（*esse simpliciter*）を与えるのは実体的形相（*forma substantialis*）に固有のことである⁵⁹。なぜなら、事物がまさにこのものとして存在するのは実体的形相によってだからである。一方、附帯的諸形相（*formae accidentales*）によって持つのは、端的な意味での存在ではなく、たとえば大きいとか色があるとか、そういった「ある限られた意味での存在」（*esse secundum quid*）である。したがって、もし質料に端的な意味での存在を与えるのではなく、他の形相によっ

⁵⁷ Cf. アリストテレス『形而上学』VIII, 1045b17-22:「しかし実際には、さきほど言ったように、事物の最後の〔最も近い〕質料とその型式とは、前者は可能的に、後者は現実的に、同じであり一つである。〔中略〕すでに各々の事物はそれぞれ或一つのものであり、その可能的なあり方と現実的なあり方とはなんらか一つなのである。」出隆訳「形而上学」『アリストテレス全集』12（岩波書店、1968年）

⁵⁸ Cf. *Liber de causis*, prop. 4

⁵⁹ Cf. *ST I*, q. 76, a. 6, cor.:「あらゆる現実態の間で第一に位するものは存在 *esse* ということにほかならない。それゆえ、質料が現実的に存在するというより前に、それが熱くあるとか量的であるとかいうごときことを理解することは不可能といわなくてはならない。現実的に存在する *esse in actu* ということが得られるのは、然しながら、既述のごとく、実体的形相によってであり、これが端的な意味において存在せしめるのである。だからして、およそ何らかの附帯的な態勢が実体的形相よりも前に、また従って魂よりも前に、質料のうちに先在していることは不可能である。」（大鹿訳）

で⁶⁰すでに現実態において存在している質料に到来するような形相は、実体的形相ではないであろう。

このことから、ある人々がそう考えることを欲したような、実体的形相と質料の間に何らかの仲介的な実体的形相が入るということが不可能なのは明らかである。彼らの主張によれば、一つの類が他の類の下に秩序づけられている諸々の類の階層という仕方では、質料には様々な形相から成る階層が存在する。たとえば、質料は一つの形相によって現実態において存在する「実体」となり、別の形相によって「物体」となり、更に別の形相によって「生命体」となる、という具合に続くのである⁶¹。しかし、たとえこの説を取るとしても、現実態における実体としての存在をもたらす最初の形相のみが実体的形相であることになるであろう。その他のすべての形相は附帯的形相である。なぜなら、すでに述べたように、実体的形相とは個の実体 (*hoc aliquid*) を生じさせる形相だからである。それゆえ、こう言わなければならない。事物は、数的に一つの同じ形相によって、実体として存在するものであり、最終的で最特殊な種 (*ultima species specialissima*) に属するものであり、中間的なすべての類に属するものなのである⁶²。

以上のことから、次のように言うべきである。自然的諸事物の形相は数のごとくであるから、—— 『形而上学』第八巻に述べられているように⁶³、数においては、一 (*unitas*) が加えられるあるいは減ぜられることによって、種の相異

⁶⁰ Leonina 版と Robb 版は *per aliam formam*, Marietti 版は *per aliquam formam*.

⁶¹ トマスは *In De anima* において、この説をアヴィケブロンに帰している。 *In De anima* II, 258-264 を参照。

⁶² たとえば、この人間は、一つの同じ実体的形相によって、個の実体として存在し、人間という最終的な種に属し、そして哺乳類、動物、生物などといった中間にあるすべての類に属している。

⁶³ Cf. アリストテレス『形而上学』VIII, 1043b33-1044a2: 「或る数を成す部分の幾つかがその数から減ぜられまたはその数に加えられると、たとえどれほどわずかが減ぜられようと加えられようと、もはやその数はもとの数と同じ数ではなくて異なる数であるが、あたかもそのように、定義にしても本質にしても、その構成部分のいずれかがそれから減ぜられまたはなにかがそれに加えられると、もはや同じそれではないであろう。」 (出訳)

が生じる⁶⁴ —— 質料がそれによって諸々の異なる種に構成されているところの自然的諸形相の間の相異は、一つの完全性に別の完全性が付け加わることによって生じているのだと理解しなければならない。たとえば、一つの形相は質料を物的存在において構成するのみである。(これは当然ながら、質料的諸形相の⁶⁵最低の段階である。それは、質料が物的諸形相に対してのみ可能態にある段階だからである。先の問題において明らかにされたように⁶⁶、非物的であるものは非質料的なのである。)しかし、より完全な別の形相は、物的存在において質料を構成し、更にそれに生命的存在を与える。更に別の形相は、物的存在と生命的存在を与え、それに更に感覺的存在を加える。このような仕方でもた別の形相へと続くのである⁶⁷。

したがって、次のように理解するべきである。下位の段階の完全性において質料を構成する限りにおいてはより完全である形相も、同時にそれは質料と複

⁶⁴ Cf. *ST I*, q. 47, a. 2, cor.: 「『形而上学』第八巻にいうごとく、事物の形相は数のごとくである。数の場合は、すなわち、「一」unitasの加わり乃至は減ぜられることによってその種 species が別な種になってしまうのである。」日下昭夫訳『神学大全』4 (創文社, 1973年)

⁶⁵ Leonina 版と Robb 版は *formarum materialium*, Marietti 版は *formarum animalium*.

⁶⁶ Cf. *QDA*, q. 6, cor., 151-154: “Vnde materia non inuenitur nisi in rebus corporalibus, secundum quod philosophi de materia sunt locuti, nisi aliquis materiam sumere uelit equiuoce.” (「それゆえ、「質料」という語を故意に同名異義的に用いるのでない限り、哲学者たちが質料についてそう述べているように、質料は物的諸事物の内にしか見出されないのである。」)

⁶⁷ Cf. *CT I*, 92: 「数において種・形象が多様になるのは、それらのあるものが他のものに付け加わることによってであるように、質料的事物のうちでは、ある形象が他の形象を完全さに関して凌駕している。すなわち、生命を持たない物体のうちの完全さに属するものはなんであれ、植物も有しており、それもさらに上の仕方でも有している。またさらに、植物が有しているものは動物も有しており、そして何かがより上のものになっている。[中略] それゆえ、より上位の段階の形相は、自身のうちに、より下位の段階の完全性をすべて有しているのだから、それから類が取り出される場合と、それから種差が取り出される場合とで、別の形相があるのではなく、まさに同じ形相から、すなわち、それがより下位の段階の完全性を有していることにより、類はとりだされるのである。しかしながら、より上位の段階の完全性を有する限りにおいて、それからは種差が取られる。そして、そのようにして、たとえ動物が人間の類であり、理性的であることがそれ[人間]を成り立たせる種差であっても、それでも、最初の異論に反論したとおり、人間のうちに、感性的靈魂と知性的靈魂とが別のものとしてあらねばならないということにはならない。」山口隆介訳『神学提要』(知泉書館, 2018年)

合されたものなのであり⁶⁸、更に上位の完全性に対しては「質料的なもの」として理解される⁶⁹。このような仕方でも更に上位の完全性へと進むのである。たとえば、第一質料は⁷⁰、物的存在においてすでに構成されているものである限り、生命という、より上位の完全性に対しては、質料なのである。またそれゆえに、「生きている身体」において「身体」は類であり、「生きている」あるいは「魂ある」は種差である。なぜなら、類は質料から取られ、種差は形相から取られるからである⁷¹。このようなわけで、下位の〔完全性の〕段階で現実態において質料を構成している形相は、その同一の形相がより上位の〔完全性の〕段階で現実態において質料を構成する限りにおいて、ある意味で質料とその形相自身の間なのである。

一方、質料は、それが下位の段階の完全性において実体的存在に構成されたものとして理解される限り、諸々の附帯性の基体として理解されうることになる。なぜなら、実体は、完全性のその下位の段階に即して、それに必然的に内在している何らかの固有の附帯性を有しているはずだからである。たとえば、質料が形相によって物的存在において構成されているということから、直ちにそこには体積 (*dimensiones*) が存在することが伴うのであり、その体積によ

⁶⁸ Leonina 版は *forma perfectior, secundum quod constituit materiam in perfectione inferioris gradus, simul cum materia composita intelligatur ut materiale respectu ulterioris perfectionis*, Robb 版は *forma perfectior, secundum quod constituit materiam in perfectione inferioris gradus, simul cum materia compositum intelligatur ut materiale respectu ulterioris perfectionis*, Marietti 版は *forma perfectior, secundum quod simul cum materia compositum constituit in perfectione inferioris gradus, intelligatur ut materiale respectu ulterioris perfectionis*. (イタリックは筆者)

⁶⁹ Cf. アリストテレス『形而上学』VIII, 1044a21-22: 「或る質料が他のものの〔質料の質料〕であるとすると、同一の事物に数多くの質料があることになる。」 (出訳)

⁷⁰ Leonina 版と Marietti 版は *materia prima*, Robb 版は *materia et forma*.

⁷¹ Cf. *De ente*. II, u. 172-179: 「ここからして類は質料であるのではないが、質料からして取られたものなのである。そのことは、体 *corpus* が名付けられるのはそのうちに三つの次元が指定されうのような、そうした完全性を有することからしてであるが、その完全性はさらに上位の完全性にたいして質料にあたるものとして関係づけられていることから明らかな通りである。他方、種差はそれとは逆に、その最初の意味のうちには確定された質料をふくむことなしに、確定された形相からして取られた何らかの名称として (全体を表示するの) である。」 (稲垣訳)

って質料は様々な部分に分割されうること、そして、その様々な部分に即して様々な形相を受け取りうるものであることが理解されるのである⁷²。更には、質料が何らかの実体的存在として構成されたものと理解されることによって、質料がより上位の完全性へと態勢づけられるための諸々の附帯性を受け取りうるものとして理解されうるのであり、その附帯性に即してその質料は更に高い完全性を受け取るのに相応しいものとなるのである。さて、このような諸々の態勢 (dispositiones) は作動因によって (ab agente) 質料の内にもたらされたものとして形相に先だつて理解される。しかしそれらは諸々の附帯性なのであり、形相による以外には質料の内に生じることのない、その形相に固有のものである⁷³。これらの附帯性は、諸々の態勢であるかのように質料の内に形相に先だつて理解されるのではない⁷⁴。ちょうど原因が結果より先であるように、むしろ形相のほうがそれらに先だつて理解されるのである⁷⁵。

⁷² Cf. QDV, q. 5, a. 9, ad 6: 「次元は質料の内に自然本性的な形相の前にあらかじめ理解されるが、それは完全な現実態においてではなく、不完全な現実態においてである。したがって、次元は質料と生成の方向ではより先であるが、完全なものの方では形相がより先である。ところで、或るものが働くのはそのものが完全なもので現実的にあるものであるかぎりにおいてであつて、可能態にあるかぎりにおいてではない。実際、可能態にあるかぎりでは、働きかけられるのである。したがって、質料とか質料の内にはあらかじめ存在している次元とかが働かないとしても、形相が働かないことは帰結しないで、その逆なのである。」山本耕平訳「真理論」『中世思想原典集成』II-1 (平凡社, 2018年)

⁷³ Leonina 版は *quedam accidentia ita propria forme quod*, Robb 版は *quaedam accidentia ita propriae formae quod*, Marietti 版は *quaedam accidentia impropria formae, quae*. (イタリックは筆者)

⁷⁴ Cf. ST I, q. 76, a. 6, cor.: 「現実的に存在する *esse in actu* ということが得られるのは、然しながら、既述のごとく、実体的形相によってであり、これが端的な意味において存在せしめるのである。だからして、およそ何らかの附帯的な態勢が実体的形相よりも前に、また従つて魂よりも前に、質料のうちに先在していることは不可能である。」(大鹿訳)

⁷⁵ Cf. ST I, q. 76, a. 6, ad 1 「ところで、それぞれの類にはその固有の附帯性が伴うものなることは明らかである。それゆえ、ちょうど、質料がその存在 *esse* において完成されたものとして物体性の理解に先だつて理解されるし、以下同様であるごとく、同じようにして有 *ens* に固有なもろもろの附帯性も物体性に先だつて理解されるのである——。形相に先だつて質料における態勢が理解されるのは、このような仕方においてでしかないのであつて、つまり、形相のあらゆる果に関して先だつわけではなく、単に後に続く段階の果に関する限りにおいてでしかない。」(大鹿訳)

魂は、実体の限定された種において人間を構成するのであるから、実体的形相である。それゆえ、魂と第一質料との間に他の実体的形相は一切存在しない。そして、理性的魂それ自身によって⁷⁶、人間は完全性の様々な段階に即して完成されている。すなわち、人間は物体であり、生命体であり、理性的動物なのである⁷⁷。そして質料は、たとえば物体であること、生命体であること、動物であることといった下位の段階の完全性を、理性的魂それ自身から受け取るものとして理解されるのであるから、質料が有しているその諸々の適切な態勢も一緒に理解されなければならない。質料は理性的魂が究極的な完全性を与えている限りにおいて、理性的魂に固有のものなのだからである。それゆえ魂は、存在を与えている形相である限りにおいて、自らと第一質料との間にいかなる媒体も持たないのである。

しかしながら、すべてのものは現実態にある限りにおいてはたらくのであるから、質料に存在を与えているその同じ形相は、はたらきの根源でもある。それゆえ、魂は必然的に、その他のあらゆる形相と同様に、[身体の]はたらきの根源でもある。しかるに、はたらきは現実態において存在しているものが有しているのであるから、はたらきの能力における諸形相の段階は、存在の完全性における諸形相の段階に即しているのだということを考慮すべきである。つまり、存在を与えることにおいて完全性がより高い形相であるほど、はたらきにおける能力もより高いのである。それゆえ、より完全性の高い形相は、完全性の低い形相に比べて、より多くのそしてより多様なはたらきを有しているのである。そしてそれゆえに、完全性の低い諸事物においては、はたらきが多様であるためには附帯性が多様であればそれで十分であるが、しかし完全性の高い

⁷⁶ Leonina 版と Marietti 版は *ab ipsa anima rationali*, Robb 版は *ab ipsa anima*.

⁷⁷ Cf. *ST I*, q. 76, a. 6, ad 1: 「より完全な形相は、およそその下位の形相に属するほどのことからのことごとくを、そのちからの上で *virtute* 包含している。だからしてそれは、一つの同じものとして存在しながら、さまざまな完全性の段階に即して質料を完成する。たとえば、本質を以てすれば一つの同じものであるところの形相が、人間が現実的な有 *ens actu* たるゆえんの形相でもあるし、物体 *corpus* たるゆえんの形相でもあるし、生物 *vivum* たるゆえんの形相でもあるし、動物 *animal* たるゆえんの形相でもあるし、また人間 *homo* たるゆえんの形相でもあるのである。」 (大鹿訳)

諸事物においては、それに加えて各部分が多様であることも必要とされるのであり、形相がより完全であればあるほど、よりいっそう多様であることが必要とされるのである。たとえば火の場合には、軽さに即して上方へと運ばれ、熱に即して熱するなどといった具合に、多様な附帯性に即して多様なはたらきが火に適合していることを我々は見る。だが、これらのはたらきはどれも、火のあらゆる部分に即して火に適合しているのである。しかし、より高貴な形相を有している「魂ある諸物体」(*corpora animata*)においては、多様な部分がそれぞれ異なるはたらきのために割り当てられている。たとえば植物においては、根のはたらきと幹のはたらきと枝のはたらきは、それぞれ異なるのである⁷⁸。そして、魂ある物体がより完全なものであればあるほど、その完全性のゆえに、各部分にはより高い多様性が見出される。それゆえ、理性的魂は質料的形相の中で最も完全な形相なのであるから⁷⁹、人間〔の身体〕においては様々に異なるはたらきのための最も多様な諸部分が見られるのである。そして、魂は各部分のはたらきに適した仕方、それぞれの部分に実体的存在を与えている。そのしるしに、魂が取り去られると、肉体も目も、同名異義的にしか肉体や目として留まらないのである⁸⁰。

⁷⁸ Leonina 版は *alia est operatio radicis, et stipitis et ramorum*, Robb 版と Marietti 版は *alia est operatio radicis, et alia rami et stipitis*.

⁷⁹ Leonina 版と Robb 版は *perfectissima formarum materialium*, Marietti 版は *perfectissima formarum naturalium*. (イタリックは筆者)

⁸⁰ Cf. SCG II, c. 69, 1461: 「身体と魂は現実態において存在している二つの実体ではない。そうではなく、その両者から現実態において存在する一つの実体が生じるのである。実際、人間の身体は魂がある場合とない場合とでは現実態において同じではないのであり、身体を現実態において存在させるのが魂なのである。」(川添訳)

トマスによれば、魂が離れた身体は、人間の魂という実体的形相を失うのであるから、もはや人間の身体とは言えないのである。ただしキリストの場合は別である。次の箇所を参照。ST III, q. 50, a. 5, ad 1: 「他のいかなる人間の場合も、キリストの死せる体のように死んだ体は何らかの恒久的なヒュポスタシスに合一されたままにとどまることはない。したがって、他のあらゆる人間の場合、死んだ体は端的にはなく、何らかの仕方で同一のものである。なぜなら、質料に即しては同一であるが、形相に即しては同一ではないからである。他方、キリストの体は、前述のように、基体の同一性のゆえに端的に同一のものにとどまるのである。」稲垣良典訳『神学大全』37・38(創文社, 2011年)

しかし、諸々の道具における序列は、はたらきの序列に即していなければならぬのであり、魂によってなされる多様なはたらきにおいては、一つのはたらきが自然本性的に別のはたらきに先行するのであるから⁸¹、身体の一つの部分が自らのはたらきをなすために別の部分によって動かされることは必然的である。それゆえに、魂が動者であり諸々のはたらきの根源である限りにおいて、魂と身体全体との間に何らかの媒体が入るのである。なぜなら、魂はある最初の部分を媒介として他の諸部分をそれぞれのはたらきへと動かすからである⁸²。たとえば、魂は心臓を媒介としてその他の身体部分を生命的なはたらきへと動かすのである。しかしながら、身体に存在を与えていることに関する限りにおいては、魂は身体の全ての部分に実体的な特有の存在を無媒介的に与えている。このように魂が形相としては媒体なしに身体と合一されており、動者としては媒体を介して身体と合一されているということは、多くの人によって言われていることである⁸³。そしてこの見解は、魂は身体の実体的形相であると主張したアリストテレスの教説に基づくものである。

しかし、ある人々はプラトンの教説に基づいて、一つの実体が他の実体と合一されるような仕方で魂は身体と合一されていると主張しており、魂がそれを介して身体と合一されているところの媒体を指定する必要があると考えている。その理由は、異なる別々の実体どうしは、それらを一つにする何らかのものな

⁸¹ Leonina 版は *precedit aliam*, Robb 版と Marietti は *praecedat alteram*.

⁸² Leonina 版は *mediante aliqua prima parte mouet alias partes*, Robb 版と Marietti 版は *mediante aliqua prima parte primo mota movet alias partes*. (イタリックは筆者)

⁸³ Cf. *In De anima* II, c. 1, 387-392: “Et ideo sicut corpus habet esse per animam sicut per formam, ita et unitur anime immediate in quantum anima est forma corporis; set in quantum est motor, nichil prohibet aliquid esse medium, prout una pars mouetur ab anima mediante alia.” (「それゆえ、身体は形相によって存在を有するという仕方で魂によって存在を有している。同様に、魂が身体の形相である限りにおいて、魂は身体と無媒介的に合一されているのである。しかし魂が身体の動者である限りにおいては、一つの部分が他の部分を媒体として魂に動かされるという仕方で、何らかの媒体が存在することは何ら差しつかえがない。」) ; SCG II, c. 71, 1481: 「とはいえ、魂と身体との間に何か媒介となるものがあると語ることは可能である。だが、その媒介は存在するという点においては、動かすという点と生成〔誕生〕の途上という点においてのことである。」(川添訳)

しには結合されないからである。かくして、ある人々は精気と体液が魂と身体との間の媒体であると主張し、ある人々は光が媒体であると主張し⁸⁴、またある人々は魂の能力とかそういったものが媒体であると主張したのである。しかしながら、もし魂が身体の形相であるならば、これらのいずれも必要なものではない。なぜなら、個々のものは、それが「存在しているもの」(ens)であることに即して「一」(unum)なのだからである。形相はそれ自身として(secundum se ipsam) 質料に存在を与えるのであるから、それ自身として固有の質料と合一されているのであり⁸⁵、[形相と質料を] 結びつける何か他のものを介して合一されているのではないのである⁸⁶。

【異論への解答】

- (1) 第1の論に対しては次のように言わなければならない。魂の諸力(uires)とは、それをを用いて魂がはたらきをなす、魂の諸々の質(qualitates)である。したがって、それらは、魂が身体を動かすことに関する限りにおいては、魂と身体の間に入る媒体である。しかし、魂が身体に存在を与えることに関する限りにおいては、そうではない。とは言

⁸⁴ Cf. アウグスティヌス『創世記逐語註解』VII, 15:「だから確かに人間の魂の本性は土から成るのでもなく、水からでも空気からでも火からでもない。しかしながら自らの身体より粗い質料、つまり自らの肉体を構成するものへと変化した湿った土のなものを、魂はより微細な身体の本性、つまり光や空気によって統治しているのである。[中略]だから魂は、非物的なものであるので、非物的なものに最も近い火あるいはむしろ光や空気をまず動かし、これを通してより粗大な身体の成分、つまり水や土を——これによって身体の堅固さが保たれる——動かすのである。」片柳栄一訳『アウグスティヌス著作集』16(教文館, 1994年)。アウグスティヌスのこの見解に基づく異論がST I, q. 76, a. 7, arg. 1に挙げられている。

⁸⁵ Leonina版とRobb版はunitur materie/materiae proprie/propriae, Marietti版はunitur materiae primae.

⁸⁶ Cf. ST I, q. 76, a. 7, cor.:「もし[中略]魂は形相として身体と一つになるのだとするならば、ここでもはや、何らかの物体を媒介として身体と一つになるというごときことは不可能である。その理由はどのように、ものはそれが有ensであると同じ仕方において一unumである。形相は、然るに、自己の本質によって現実態たるがゆえに、自己自身によってものを現実態において存在せしめるものなのであり、何ら媒介を通じて存在を与えるものではない。」(大鹿訳)

え、『霊と魂について』と題されているその書はアウグスティヌスの書ではないということ⁸⁷、そしてその書の著者は⁸⁸、魂〔の本質〕は自らの能力そのものであると主張しているということを知るべきである⁸⁹。それゆえ、この異論にはまったく説得力がない。

- (2) 第2の論に対しては次のように言わなければならない。魂は現実態である限りにおいて形相であり、同様に、動者である限りにおいて現実態である。このように、同じことに基づいて魂は形相でありまた動者である。しかしながら、形相である限りの魂と、動者である限りの魂では、それぞれの果(effectus)が異なっている。区別はこのことに立脚しているのである。
- (3) 第3の論に対しては次のように言わなければならない。動者と動かされるものの自体的な合一(unum per se)は、動者と動かされるものの関係だけからは生じない。魂が身体の形相である限りにおいて、魂である「この動者」と身体である「この動かされるもの」の自体的な合一が生じるのである。
- (4) 第4の論に対しては次のように言わなければならない。〔魂と身体の〕複合体に属する魂のそのはたらきに関する限り、魂と身体のどの部分との間にも何ら媒体は入らない。しかし、魂が最初にその部分を通してそのはたらきを行う身体の一つの部分が存在する。この部分がそのはたらきの始点

⁸⁷ *Liber de spiritu et anima* の著者は *Patrologiae Latinae* 第40巻では偽アウグスティヌス Pseudo-Augustinus と記されている。大鹿一正訳『神学大全』6(創文社, 1969年)420頁註262によれば、現在ではこの書はクレルヴォーのアルシュール Alcherus Claravallensis に帰されている。RobbもRowanもこの書の著者を Alcherius Clavallensis (Alcher of Clairvaux) としている。トマスは QDA q. 12, ad 1 において、この書の著者はアウグスティヌスではなくシトー会修道士だった誰かであると言われていたのであり、そこに書かれていることにあまり重きを置くべきではないと述べている (“*liber iste De spiritu et anima non est Augustini, set dicitur cuiusdam Cisterciensis fuisse; nec est multum curandum de hiis que in eo dicuntur.*”)。この書が偽書であり信頼できる文書ではないことについては *De spir. creat.* a. 3, ad 6 と a. 11, ad 2 にも述べられている。

⁸⁸ Leonina 版は auctor illius libri, Robb 版と Marietti 版は auctor illius.

⁸⁹ 魂の諸能力が魂の本質そのものであるか否かについては QDA q. 12 において論じられており、トマスはそれを否定している。この問題は STL q. 77, a. 1 および *De spir. creat.* a. 11 においても論じられている。

(*principium*) である限りにおいて、その部分が、魂とそのはたらきに関与する身体の他のすべての部分との間の仲介部分となるのである。

- (5) 第5の論に対しては次のように言わなければならない。質料をある形相に固有のもの (*propria*) にする附帯的な諸態勢は、全面的にその形相と質料の間の媒体であるわけではなく、最終的な完成を与えるものである限りの形相と、下位の段階の完全性によって既に完成されている限りの質料との間の媒体なのである。と言うのも、質料はそれ自体としては完全性の最も低い段階に対して固有のものである⁹⁰。なぜなら、質料はそれ自体としては物體的な実体的存在に対して可能態にあるからであり、そして、このためには何の態勢も必要ではない。しかし、質料におけるこの〔最下位の〕完全性を前提として、より上位の完全性のために諸々の態勢が必要とされるのである。しかしながら⁹¹、魂の諸能力は魂に固有の附帯性なのであり、魂なしには存在しないのだということを知るべきである⁹²。それゆえ、先に述べたことから理解されうるように⁹³、それらが魂の諸能力である限りにおいては、たとえば自育的魂の能力が感覚的魂のための態勢と呼ばれるごとく、魂の下位の部分の能力が上位の部分のための態勢と呼ばれることを除いては⁹⁴、魂の諸能力は魂への態勢という性格 (*ratio*) を持たないのである⁹⁵。
- (6) 第6の論に対しては次のように言わなければならない。この異論は、動物

⁹⁰ Leonina 版と Robb 版は *propria* respectu infimi gradus perfectionis, Marietti 版は *prima* respectu infimi gradus perfectionis. (イタリックは筆者)

⁹¹ Leonina 版と Marietti 版は *Tamen*, Robb 版は *Item*.

⁹² Cf. *ST I*, q. 29, a. 1, ad 3: 「これはつまり、固有な附帯性というものが実体的形相 *formae substantiales* の果であって、これを顕示するものなることによる。」 (山田訳)

⁹³ 解答 u. 206-229 を参照

⁹⁴ Leonina 版は *nisi potentie inferioris partis anime*, Robb 版と Marietti 版は *nisi secundum quod potentiae inferioris partis animae*. (イタリックは筆者)

⁹⁵ Leonina 版は *non habent rationem dispositionum*, Robb 版は *non habet rationem in dispositionem*, Marietti 版は *non habent rationem dispositionis*.

(animal) は⁹⁶「動かされるものである身体」と「動者」の二つの部分に分かたれる⁹⁷と結論づけている。このことは確かに真である。しかしながら、魂は身体を把握 (apprehensio) と欲求 (appetitus) に基づいて動かすのだということを⁹⁸理解するべきである⁹⁹。人間における把握と欲求には二通りある。一つは魂にのみ属し、身体器官を通してなされるのではないものである。この把握と欲求は魂の知性的部分に属している。もう一つは〔魂と身体の〕結合体に属するものであり、この把握と欲求は魂の感覚的部分に属している。しかし、知性的部分に属している把握と欲求は、感覚的部分に属している把握と欲求を介することなしに身体を動かすことはない。なぜなら、運動・変化 (motus) は個々のものに即したものであるため¹⁰⁰、知性に属している普遍的な把握は、感覚に属している個別的な把握を媒介とすることなしには¹⁰¹、身体を動かすことがないからである。それゆえ、人間もしくは動物が「動かす部分」と「動かされる部分」に分かたれる場合、それは、単独の「魂」と単独の「身体」の区別なのではなくて、魂ある身体 (corpus animatum) の一つの部分とその他の部分の区別なのである¹⁰²。なぜなら、魂ある身体、把握することと欲求することがそのはたらきであるところのその部分が、身体全体を動かしているのだからである。

また、もし知性的部分が無媒介的に動かしているのであり、したがって、人間において動かしている部分は魂のみであるという立場を取るとして

⁹⁶ Leonina 版は animal diuidatur, Robb 版と Marietti 版は anima vel animal dividatur.

⁹⁷ Leonina 版と Robb 版は una sit corpus mobile et alia sit motor, Marietti 版は una est sicut corpus mobile, et alia sicut motor. (イタリックは筆者)

⁹⁸ Leonina 版は anima mouet corpus secundum apprehensionem et appetitum, Robb 版と Marietti 版は anima movet corpus per apprehensionem et appetitum. (イタリックは筆者)

⁹⁹ Cf. アリストテレス『魂について』III, 433a13: 「というのも、何かを欲求したり忌避したりするのでなければ、いかなるものも強制による場合以外は動かないからである。」(中畑訳)

¹⁰⁰ Leonina 版は secundum aliquod singulare, Robb 版と Marietti 版は circa aliquod singulare.

¹⁰¹ Leonina 版と Marietti 版は nisi mediante particulari, Robb 版は nisi movente particulari.

¹⁰² Leonina 版は in unam partem corporis animati et aliam, Robb 版と Marietti 版は in unam partem corporis animati et animam. (イタリックは筆者)

も、解答は先ほど得た解答に即したものであり続けるであろう。なぜなら、人間の魂は魂自身における最高のものに即して、すなわち知性的部分に即して¹⁰³、「動者」であることになるからである。更に「動かされるもの」もまた、単なる第一質料ではなく、物的で生命的な存在において構成されたものである限りにおける第一質料であることになる¹⁰⁴。そしてそれは同一の魂によって構成されたものであって、それ以外の形相によって構成されたものではない。それゆえ、魂と第一質料の間にそれらを仲介する実体的形相を指定する必要はないことになるであろう。

だが、動物においては、把捉と欲求によるものではない運動も存在する。それはすなわち心臓の運動であり、また、成長の運動と身体全体に注がれる栄養補給の運動である¹⁰⁵（これは植物とも共通している¹⁰⁶）。それゆえ、これらの運動に関しては¹⁰⁷、次のように言わなければならない。既に述べたことから明らかなように、魂は動物に自らに固有であるものを与えるだけでなく、下位の諸形相に属するものをも与えるのであるから¹⁰⁸、自然的諸物体においては下位の諸形相が自然的運動・変化の根源であるのと同様に、動物の身体においては魂がその自然的運動・変化の根源なのである。それゆえに哲学者（アリストテレス）は『魂について』第二巻において¹⁰⁹、

¹⁰³ Leonina 版は *secundum partem intellectiuam*, Robb 版と Marietti 版は *per partem intellectiuam*.

¹⁰⁴ Leonina 版と Marietti 版は *constituta in esse corporali et uitali / vitali*, Robb 版は *constituta in esse corporali et in tali*. (イタリックは筆者)

¹⁰⁵ Leonina 版は *alimenti diffusi per corpus*, Robb 版と Marietti 版は *alimenti diffusi per totum corpus*.

¹⁰⁶ Leonina 版と Robb 版はこの部分が () に入れられているが、Marietti 版には () が無い。

¹⁰⁷ Leonina 版は *quantum ad hos motus*, Robb 版と Marietti 版は *quantum ad hujusmodi motus*.

¹⁰⁸ Marietti 版はこの部分 *cum anima animali non solum det id quod est proprium sibi, sed etiam id quod est inferiorum formarum, ut ex dictis patet* を () に入れている。

¹⁰⁹ Cf. アリストテレス『魂について』II, 414a25-28: 「つまり、魂は身体そのものではなく身体に属する何かなのであり、そしてこのゆえに、魂は身体のうち、しかもある特定のあり方の物体（身体）のうち存在するのである。〔中略〕それぞれのものの終極実現状態

魂はこのような身体の自然本性(*natura*)であると言っているのである¹¹⁰。そしてこのことから、魂の諸々のはたらきは「魂的はたらき」(*operationes animales*)と「自然的はたらき」(*operationes naturales*)に区別される。すなわち、魂自身に固有である限りにおける魂によるはたらきが「魂的はたらき」と言われ、下位の自然的諸形相の果を生じさせる限りにおける魂によるはたらきが「自然的はたらき」と言われるのである。

このことから、それゆえ、次のように言うべきである。ちょうど火が自らの自然的形相によって上方へと向かう自然的運動を有しているように、魂ある物体のある部分に一見把握によるものではないような運動が見られるとしても、その部分はその運動を魂によって自然的に有しているのである¹¹¹。たとえば、ちょうど火が上方へと自然的に動かされるように、血液は定められた適切な場所へと自然的に動かされる。同じように、アリストテレスが吸気と呼気について¹¹²論じている箇所ですべてしているように¹¹³、

は、「可能状態においてそれぞれのものであるもの」のうちに、つまりそれぞれに固有の素材のうちに成立することが、その自然本性のあり方だからである。」(中畑訳)

¹¹⁰ Leonina 版と Robb 版は *anima est natura talis corporis*, Marietti 版は *anima est naturalis corporis*. (イタリックは筆者)

¹¹¹ Cf. STI-II, q. 17, a. 9, cor.: 「身体各部は魂のもろもろの能力の器官ともいうべきものである。したがって、魂のもろもろの能力が、理性に服従するということに対すると同じ関係に身体各部もやはりまたあるのである。感性的ちからは、だから、理性の命令下にあるが、自然本性的なちからはそうでないがゆえに、もろもろの感性的能力によって動かされる身体の諸部分の運動は、すべて理性の命令下にあるのであるし、自然本性的なちからに従うごとき諸部分の運動は、しかし、理性の命令下にはないのである。」村上武子訳『神学大全』(創文社、1996年)

¹¹² Leonina 版と Robb 版は *de respiratione et expiratione*, Marietti 版は *de respiratione et inspiratione*. (イタリックは筆者)

¹¹³ Cf. アリストテレス『動物部分論』I, 642a31-b3: 「さて、[それではどういう風に論じたらいいのであろうか]。例をあげてみると、「呼吸にはこれという目的があり、またこの目的に達するためには必ずこれこれの原因によらなければならない」というように説明すべきである。ところで、この必然性には「あれが達せられるべき目的だとすれば、必ずこれこれの手段がなければならないということを示す条件つきの場合と、「事物がこういう状態であり、もともとこういう風になっている」という絶対的の場合とがある。すなわち、生命を保つためには必然的に体から熱が出たり、それが[外の冷気に]ぶつかってまた入ったりし、[それと同時に]空気が流入しなければならなくなる。[以上が呼吸であって]、これはすでに[生きるための条件として]必然的なことである。しかし[二つの

心臓の運動には、それによって心臓が縮められたり緩められたりしているところの血液によって引き起こされる呼吸の〔冷却という〕解決 (*resolutio spirituum*) も協働しているのであるが¹¹⁴、心臓は自らに固有の運動によって自然的に動かされているのである¹¹⁵。このように、こうした運動が見出される第一の部分は「自らを動かすもの」なのではなく、火と同じように自然的に動かされているのである。しかし、この部分が他の部分を動かしている¹¹⁶。このように動物は、その一つの部分が動かすものであり、他の部分が動かされているものなのであるから、全体として「自らを動かすもの」なのである¹¹⁷。

条件の間の関係を見ると〕、内部の熱が〔外で〕冷やされるとき抵抗するので、〔冷やす方の〕外気が入ったり出たりすることになる。〔このところは絶対的必然性を示している。〕」島崎三郎訳『アリストテレス全集』8 (岩波書店, 1969年)

¹¹⁴ Cf. アリストテレス『動物誌』I, 17, 496a30-33: 「心臓からは肺の中にも管が通じていて、気管と同じように二手に分かれ、気管からの管〔気管支〕と並行しながら肺全体に及んでいる。心臓から出る管は〔気管支の〕上に重なるが、共通〔合流〕する管は一本もなく、むしろ〔気管支と〕接することで氣息を受け取り、心臓に送るのである。」金子善彦他訳『アリストテレス全集』8 (岩波書店, 2015年) ; 『呼吸について』第15章 478a11-22: 「〔臓と呼ばれる部分のうちで〕とりわけこの肺臓という部分が、最も多くの血を含んでいる。それで、血を含む肺臓をもつがぎりの動物は、一方で、すみやかな冷却を必要とするのだが、〔中略〕他方で、肺臓の血と熱さとの多さのゆえに、その中へと、くまなく空気が入っていくことが必要なのだ。〔中略〕それで、何ゆえに、血を含む肺臓をもつものが、最も多く呼吸をするのかということ、以上のことから明らかだ。実際、熱いものほど、いっそう多くの冷却を必要とするからであり、同時に、心臓にある熱さの始原へと、氣息が容易に到達するからである。」坂下浩司訳『アリストテレス全集』7 (岩波書店, 2014年)

¹¹⁵ Cf. アリストテレス『氣息について』IV, 482b30-35: 「だが、拍動運動は何か特別なもので、先に言及した二つとは異なっている。ある時には、それは付帯的なものに思われるかもしれない。もし湿潤なものの中に多くの熱があった場合、蒸発気がその中に閉じ込められているために必然的に拍動を引き起こすのであるならば、それは付帯的ということになる。他方でそれは第一の諸部分に自然本性的にそなわっているからには、本源的な、第一のものであるようにも思われる。というのも、それはとりわけ心臓部において最初のものとしてあり、そこから、その他の身体部分に及んでいるからである。しかしおそらくは、動物の根底にある本質的なものとの関係から、それが活動状態化すると、必然的に拍動が引き起こされるのである。」木原志乃訳『アリストテレス全集』7 (岩波書店, 2014年)

¹¹⁶ Leonina 版と Marietti 版は *ista pars mouet / movet aliam*, Robb 版は *ista pars movet animal*. (イタリックは筆者)

¹¹⁷ Cf. アリストテレス『魂について』II, 412b25-26: 「ここで、部分について成り立つことを、生きている身体の全体に当てはめて理解しなくてはならない。というのも、視覚という感

- (7) 第7の論に対しては次のように言わなければならない。器官的で自然的な身体は、ちょうど質料が形相に対するように、魂に対して関係づけられている。身体がこのようなものであるのは、何か他の形相によるものなのではなく、上に明らかにされたように¹¹⁸、魂によって身体がそのことを有しているからである。
- (8) 第8の論に対しても同じように言わなければならない。『創世記』に述べられている「神は地の泥で人を形づくられた」は、それに続く「そして、その顔に命の息を吹き込まれた」に、時間において先行しているのではなく、単に自然の秩序において先行しているだけである。
- (9) 第9の論に対しては次のように言わなければならない。質料は段階に即して諸々の形相に対して可能態にある。しかしそれは、質料が段階的に実体的諸形相を受け取るということではなく、既に説明されたように¹¹⁹、質料は、より完全な形相に固有であるものを¹²⁰、下位の形相に固有であるものを媒介とすることなしには受け取らないからである¹²¹。質料が諸元素の形相を媒介として他の諸形相を受け取るとは、この意味で理解されるのである¹²²。
- (10) 第10の論に対しては次のように言わなければならない。混合物体において諸元素の形相は、自らの本質に即して存在しているわけではない。アヴィセンナはそう主張しているのであるが¹²³。なぜなら、それらの元素が質料の一つの部分と一緒に存在することは不可能だからである¹²⁴。しかし、

覚の部分と眼という身体の部分との関係は、感覚全体と感覚をなしうる——そのように特定されるかぎりでの——身体全体との関係に対して類比的だからである。」(中畑訳)

¹¹⁸ 本問題の解答 u. 191-205 および u. 230-245 を参照

¹¹⁹ 本問題の解答 u. 191-205 を参照

¹²⁰ Leonina 版は *proprium perfectioris forme*, Robb 版と Marietti 版は *proprium superioris formae*. (イタリックは筆者)

¹²¹ Leonina 版は *non recipit*, Robb 版と Marietti 版は *non recipitur*.

¹²² Leonina 版と Marietti 版は *intelligitur*, Robb 版は *oportet intelligi*.

¹²³ Cf. Avicenna, *Sufficientia* I, c. 6

¹²⁴ Cf. ST I, q. 76, a. 4, ad 4: 「アヴィセンナは、構成諸要素の実体的形相が、混合体のうちにそこなわれることなしに存続しており、混合は、構成諸要素の相互反対的な性質が「中」

もしそれらの元素が異なる部分にそれぞれ存在するのであれば、それは真の混合である「全的な混合」(mixtio secundum totum)ではなくて、見せかけの混合(mixtio ad sensum)である「寄せ集めの混合」(mixtio minima)にすぎないであろう¹²⁵。

また、アヴェロエスのように諸元素の形相が「より多く」と「より少なく」を受け取ると主張するのは¹²⁶、笑止なこと(ridiculum)である¹²⁷。それらは実体的形相なのであり、「より多く」と「より少なく」を受け取るとは不可能だからである。そして、アヴェロエスが思い描いているような、実体と附帯性の間の中間的なものも存在しないのである¹²⁸。

しかしだからと言って、それぞれの元素の形相は全面的に滅ぼされると言うべきでもない。そうではなくて、アリストテレスが言うように、

mediumに帰着せしめられることによって生ずるのでと考えた。然しながら、こうしたことは不可能である。けだし、構成諸要素の種々異なった形相は質料の種々異なった部分にしか存在することができないのであるが、こうした諸部分の間の差別のためには、次元dimensiones というもの——それなくしては質料は可分割的なものたりえない——がそこに理解されなくてはならない。だが、次元の基体たるごとき質料は物体においてしか見出されない。然るに、種々異なった物体が同じ場所において存在するということはありえない。」(大鹿訳)

¹²⁵ Cf. STI, q. 76, a. 4, ad 4: 「このようにして、だから、混合における構成諸要素は場所によって区別されるほかはないという帰結が導かれる。かくしてそれは、全体に即するものたる真の意味における混合ではなく、実は、極小なるものの併合という意味での (quae est secundum minima iuxta se posita) 見せかけの混合 mixtio ad sensum にすぎないことになろう。」(大鹿訳) () 内のラテン語は筆者

¹²⁶ Cf. Averroes, *Super De caelo* III, 67

¹²⁷ Cf. *In De Trinitate* q. 4, a. 3, ad 6

¹²⁸ Cf. STI, q. 76, a. 4, ad 4: 「アヴェロイスは、これに対して、その『天界論注釈』第三巻において、構成諸要素の形相は、その不完全性のゆえに、附帯的形相と実体的形相との中間的なものであり、かくしてそれらは、「より多く」と「より少なく」magis et minusを受け取るものであって、だから、混合にあたっては加減されて「中」に帰着し、ここに、それらに基づいて一つの形相が融合されるにいたる、となした。然し、こうしたことはなお一層不可能なことがらである。けだし、いかなる事物の場合もその実体的存在は不可分的ということにおいて成立するのであって、いやしくもこれに加え減ずるところがあればすべて種を変ずるものなること、あたかも数におけるごとくであ[る。] [中略] だから、およそ如何なる実体的形相も、「より多く」「より少なく」ということを受けとることは不可能である。また、実体と附帯性ととの中間的なものが存在するということも、それに劣らず不可能なことといわなくてはならない。」(大鹿訳)

それらは潜勢的な仕方では (*uirtute*) 存続していると言うべきである¹²⁹。つまり、それらの形相は混合体の内に、それぞれの元素の固有の附帯性が何らかの仕方では存続している限りにおいて存続しているのであり、それらの附帯性の内にそれぞれの元素の力が存続しているのである¹³⁰。

- (11) 第 11 の論に対しては次のように言わなければならない。魂が身体の形相であるのは知性的魂の本質に即してなのであって、知性的なはたらきに即してなのではない。
- (12) 第 12 の論に対しては次のように言わなければならない。魂と身体との間の均衡 (*proportio*) は、均衡がとれていることそれ自体にある。それゆえ、魂と身体との間の何らかの中間的なもの (*res media*) である必要はない。
- (13) 第 13 の論に対しては次のように言わなければならない。心臓は魂がそれを用いて身体他の諸部分を動かす第一の器官 (*instrumentum*) である。したがって、動者としての魂は、心臓を媒介として身体他の諸部分と合一されている。しかし、形相としての魂は、身体各部分と自体的かつ無媒介的に (*per se et immediate*) 合一されているのである。
- (14) 第 14 の論に対しては次のように言わなければならない。魂はその本質に即しては単純な形相であるが、しかし魂が様々なはたらきの根源であることに即しては、能力的に多様である。また、形相は質料をそれが存在するために完成するだけでなく¹³¹、それがはたらきをなすためにも完成するの

¹²⁹ Cf. アリストテレス『生成と消滅について』I, 327b29-31: 「また明らかに、混合するものは、それ以前に離存していたものが一緒になって成立していて、また再び離存することの可能なものである。したがって、それらは、物体と白のような仕方では活動実現状態としてとどまることもないし、また、どちらか一方、あるいは両方が消滅することもない。なぜなら、混合するものの可能状態は保全されているからである。」(金山訳)

¹³⁰ Cf. *ST I, q. 76, a. 4, ad 4*: 「だから我々は、アリストテレスの『生成消滅論』第一巻に従って、構成諸要素の形相が混合体のうちに存続するのは、現実的にはなく、ちからとして *virtute* にほかならないといわなくてはならぬ。すなわち、構成諸要素のそれぞれ固有の性質は加減されたものとしてではあってもやはり存続するのであって、そこには構成諸要素の形相のちからが存続しているのである。こうした「混合の性質」*qualitas mixtionis*こそが混合物体の実体的形相——例えば石の形相とか乃至はそれぞれの魂の形相とか——を受けとるに足る固有の態勢 *dispositio* にほかならない。」(大鹿訳)

¹³¹ Leonina 版と Robb 版は *mpm solum ad esse*, Marieti 版は *non solum quantum ad esse*.

であるから¹³², 魂は単一の形相であるが¹³³, 身体の諸々の部分は必然的に, 魂によって様々な仕方では, そして各部分がそれぞれのはたらきに適合するように, 完成されるのである。そしてこのことから, 既に述べたように, 諸々のはたらきの序列 (*ordo*) に即して, 各部分においては必然的に序列が存在する。しかしこの序列は, 動者としての魂に対する身体の関係性に基づくものである。

- (15) 第 15 の論に対しては次のように言わなければならない。魂の下位の諸能力が上位の諸能力を身体に結びつけていることは¹³⁴, はたらきに関する限りにおいて理解されうる。すなわち, 身体を用いてなされる下位の諸々のはたらきを上位の諸能力が必要としている限りにおいて理解されうるのである。そして身体も同様に, そのはたらきと運動・変化に関しては¹³⁵, 身体の上位の部分を通して魂と結合されているのである。
- (16) 第 16 の論に対しては次のように言わなければならない。ちょうど身体が相応しい態勢によって適切なものとなっていなければ形相が到来しないのと同様に, 相応しい態勢がなくなると¹³⁶, 形相は質料の内に留まることができない。これと同じように, 自然本性的な熱や湿気などのようなものが取り去られると, 身体はそれらによって魂を受容するものへと態勢づけられているのだから, 魂の身体への合一は解消されてしまうのである¹³⁷。し

¹³² Cf. アリストテレス『魂について』II, 415b7-12: 「同様に魂は, すでに区別された仕方に応じて, 三つの意味で原因である。すなわち魂は, (1)そこから動(運動変化)が始まる始原として, (2)「そのために」という目的として, また(3)魂をもつ身体の本質的あり方(本質存在)として, 原因なのである。」(中畑訳)

¹³³ Leonina 版と Marietti 版は *licet anima sit una forma, partes coporis*, Robb 版は *licet sit una forma, quod partes corporis*.

¹³⁴ Leonina 版は *ligare superiores vires corpori*, Robb 版と Marietti 版は *ligare superiores vires corporis*. (イタリックは筆者)

¹³⁵ Leonina 版と Marietti 版は *secundum operationem et motum*, Robb 版は *secundum operationes motuum*.

¹³⁶ Leonina 版は *cessantibus debitis dispositionibus*, Robb 版と Marietti 版は *cessantibus propriis dispositionibus*.

¹³⁷ Cf. アリストテレス『長命と短命について』V, 466a18-466b2: 「生きているものは自然本性的に湿っていて熱いものであり, 生きているということもまたそのようであることな

たがって、それらのものは態勢として魂と身体の間に入る媒体である。それがどのような仕方であるのかは、既に述べられた¹³⁸。

- (17) 第 17 の論に対しては次のように言わなければならない。体積 (*dimensiones*) が認知されうるのは、実体的形相によって実体的で物的な存在において構成された質料が認知されている限りにおいてのみである。そして、人間においてこのことは、既に述べられたように、魂以外の形相によっては生じない。それゆえ、上に説明されたように¹³⁹、このような体積は、質料の内に魂がまだ全く存在していない時に前もって認知されるのではなく、完全性のより高い段階との関係において¹⁴⁰ [完全性の低い段階にある物的存在の内に] 前もって認知されるのである。
- (18) 第 18 の論に対しては次のように言わなければならない。魂と身体は、あたかも異なる類や種に属している事物のように隔たりがあるのではない。なぜなら、先のいくつかの問題において論じたように¹⁴¹、魂と身体のもつれもそれぞれが類や種の内にあるのではなく、それらから成る複合体のみが類や種の内にあるのだからである。しかし魂はそれ自体として身体の形相であり、身体に存在を与えている。それゆえ、魂は身体と自体的かつ無媒介的に合一されているのである。
- (19) 第 19 の論に対しては次のように言わなければならない。人間の身体は天体と何らか共通するものを有している。それはしかし、光のような天体に属する何らかのものが魂と身体の間媒体として介在しているということではなく、前の問題において説明されたように¹⁴²、身体がある均衡のとれ

のだが、老年は乾いていて冷たく、死んでしまったものもまたそうだということである。
〔後略〕」坂下浩司訳『アリストテレス全集』7 (岩波書店, 2014 年)

¹³⁸ 本問題の第五異論解答を参照

¹³⁹ 本問題の解答 u. 212-217 を参照

¹⁴⁰ Leonina 版は *quantum ad ultiores gradus perfectionis*, Robb 版と Marietti 版は *quantum ad ultimos gradus perfectionis*. (イタリックは筆者)

¹⁴¹ Cf. *QDA*, q. 1, ad 13; q. 2, ad 10.

¹⁴² Cf. *QDA*, q. 8, cor.

た複合において構成されていて、反対対立性から引き離されている¹⁴³ということに関する限りにおいてである。

(以上)

¹⁴³ Leonina 版は *remotum a contrarietate*, Robb 版と Marietti 版は *remotae a contrarietate*.
(イタリックは筆者)